

ヒュームの哲学と社会科学をどう架橋するか

● 犬塚 元

坂本達哉『ヒューム 希望の懐疑主義——ある社会科学の誕生』（慶應義塾大学出版会、二〇一一年）

二〇一一年は、一八世紀思想が多く話題になった。大震災の経験は、一七五五年のリスボン大地震が啓蒙思想に与えた衝撃に関心に向けた。悲惨な震災ゆえに、ヴォルテールの『カンディッドまたは最善説』は、神の善性や全能性を疑う。神の創造したこの世界は可能のうちで最善で、われわれの経験する苦しみや悪は、神の予定した因果連関のシステムのなかでは大きな善と結びついている。「最善説optimism」として結実したライプニッツのこうした弁神論を——ジェノサイドのちにレヴィナスが弁神論の終焉を宣告したのと同じ理由から——ヴォルテールは退ける。

さらに生誕三〇〇年ゆえに、ヒュームをめぐる学術集会や出版が国内外で相次いだ。われわれは、『思想』のヒューム特集号とともに本書を得た。サントロー学芸賞と日本学士院賞を受賞した前著『ヒュームの文明社会』（一九九五年）に続く本書は、一九

八二年以降の既発表論文から成るが、著者は、この間の内外の成果を組み込みながら丹念に修正して一冊にまとめてあげている。

二冊を「相互補完的」と自ら説明するように、坂本のヒューム像は、その基本において揺るぎなく同一であり、近代商業社会の分析者にして擁護者である。「文明社会論」から「ヒューム社会科学の形成と展望」に焦点を移した本書は、経済思想にとどまらない諸相に注目するとともに、ヒュームやスミスをめぐる解釈を糸口に、日本の社会科学における西欧思想史研究も吟味する（第九章）。それは、今日の方法論的観点からはとすればナイーヴと却下されかねない、戦後の「市民社会論的思想史研究」の再評価作業である。同時代的な問題意識の存在を認めつつも、しかしその学問性を強調して、坂本はこの思想史研究の「遺産」「伝統」を理解する。禁欲的な歴史研究ながらも、鋭敏な問題意識を随所に隠さない本書は、この「遺産」を十全に継承している。

論文集としての本書には様々な議論が含まれるが、少なくとも三点について本書の特色や独自性を指摘できる。第一は、ここに含まれる国際水準の成果であり、ヒュームの「覚え書き」の執筆年代をめぐる文献学的考察が白眉である（第五章）。使い古されて曖昧となった分析概念からは離れて、問いと解答と根拠を自らの言葉で明確に語る本章は、方法も内容も最先端に位置する。

第二の特色は、政治思想への分析の拡張であり、独自性を誇るの、ヒュームを共和主義の系譜に位置づける第七章である。坂本はここで、「徳の支配」「法の支配」「人民の支配」の三原理によって共和主義概念を定式化して、アリストテレスからヒュームまで

の展開を論じる。異色なことに、この共和主義思想史にホッブズやロックが含まれるのは、上記三原理の「一部あるいは全部を大幅に修正することにより、多様な種類の共和主義的言説がなされた」として、分析概念が操作されるからである。しかし、この方法を通じて析出される系譜は、共和主義というよりは西洋の政治思想そのものとも言える。本章は、西洋政治思想史におけるヒュームの位置をめぐる解釈として読解したほうが実り多い。

最も野心的な第三の独創は、ヒュームの哲学と社会科学をどう架橋するか、という難問に解答した第一章である。「ヒュームの因果理論は、初発から「道徳学」やとりわけ「政治学」の方法論的基礎として構想され」、「自然科学と社会科学との双方に適用可能な因果理論」によって、「自然科学をモデルとする社会と歴史における因果法則性の発見」がなされた、というのである。

刺激的な解釈である。この問題提起を受けて、ヒューム因果論の社会科学の意義について考えてみよう。第一に、「社会と歴史における因果法則性の発見」(さらに、人間本性や「隠れた原因」への着目)は、トュキュデデスが端的に示すように、古代以来の歴史叙述や政治学に共通した属性である。ヒューム自身、因果説明は哲学・歴史学・政治学などの学問の本質的属性であり、過去もそうだったと指摘する。第二に、それゆえ真に問われるべきは、因果論一般でなくヒューム固有の因果論がいかなる意味で彼の社会科学の「方法論的基礎」か、との点である。

第三に、ヒューム固有の因果論は、少なくとも彼の宗教批判の「方法論的基礎」であった。いうまでもなく、ヒュームの因果論

の独自性は、因果関係を対象間の関係でなく、経験にもついた精神活動の産物として捉えた点にある。因果論におけるこうした認識論的転回、人間の因果推論能力を吟味して、不適切な因果推論を批判する立脚点となる。ヒュームはこの観点を応用して、続けて啓示・自然宗教を懐疑に晒す。人間の因果推論能力にもとづく限り、奇跡もデザイン論証も疑わしい、というのである。

世界の秩序という「結果」から神の存在や計画という「原因」を導くデザイン論証に対するヒュームの批判をふまえるならば、第四に、因果法則と、秩序全体を貫く因果連関の体系的構造とは、慎重に区別せねばならない。つまり、ヒュームが「自然科学と社会科学との双方に適用可能な因果理論」を構築したにせよ、このことは、自然秩序にも社会秩序にも因果連関の体系的構造が存在する、と考えたことを意味するわけではない。

もとより本書は、こうしたナイーヴさと無縁である。しかし、英文表題 Hume's sceptical optimism は、誤解を招きかねない。ヒュームの時代に optimism は「最善説」をもつばら意味した。しかもそれはヒュームとは相性が悪い。この世にあまねく悪や苦しみを指摘し、神の計画した因果連関の体系の存在を疑い、ライプニッツの「最善説」を批判する、という点でヒュームはヴォルテールと連帯したからである。以上四点を換言すれば、ヒューム因果論の社会科学の意義の解明のためには、彼の歴史叙述や宗教論の分析を回避できないことである。卓越した思想家である著者に、次にこれを期待しているのは、評者に限られないはずである。